彫刻家・舟越 桂の創作メモ

個人はみな絶滅危惧種という存在

舟越 桂

Katsura Funakoshi

集英社

彫刻家・舟越 桂の創作メモ

個人はみな絶滅危惧種という存在

舟越 桂

Katsura Funakoshi

tea の milk が …

Ulster Museum。 ●Beckett の
展示は 写真だけ。子供の時から良い
顔をもってた。Rugby、Cricket。
画廊を回る。

York ●St. Octagon G. 外から。
Art college. peter Neill とい
は休み。

Art Council G. Sean Keating が
いい絵だと思う。2Fの Tea ro
で、コーヒー。えらく Boin の女の
Video : Hopper. しがき。
Gallery の ●オジさんに、Belfast の画廊
おしえてもらう。 雨。
Tom Caldwell G.
Fenderesky G.
Otter G. ——— おもしろかったし。

Lisburn Rd. 古道具屋、くるみ
2つで
アンティーク屋、13：ブ
トランプ。

あかるく、セクシーなおばちゃん。
パブを●教えてくれる。
Bradbury plc. Varey's (?
にぎやかで、感じのいい所。

シャワー
より目の
Jerry

Contents

Art direction : Masashi Fujimura
Design : Keiko Takahashi
(Masashi Fujimura design office)

アトリエは迷いの場であり、迷うから道を探す

オリジナリティと
リアリティー
作品と作家の関係
近いもの
アイデンティティー
作品と他者作品との相異
独自性

ひとつの世界、
新たな世界を
成り立たせること
(そこにおいて作者は神になってる?)
世界とは、宇宙であり
宇宙とは秩序が。

ルネ・マグリットの絵は、
ジョージア・オキーフの絵に
似ているかもしれない。

POST CARD

首や後頭部の
接着時、
ゴムロープに
メジャーのような
印をつけておく。

…学院 開設記念
デッサン展「深…

造形大新校舎でのデッサン展
タイトル用
'05.5/4.

線

- そこを通る線
- 線のはなし。
- 線の内側、外側
- 線をめざして、そこをめざす線
- 線の始まりと終わり
- 線の地図
- 線の奥に、 線の中、線の奥行き。
- ひろがる線
- みつける線、線をみつける。
- 深い線を(深い一本の線で)

'05のハワイの版画

○夜を眠らず
○朝を待つスフィンクス
○月の夜のスフィンクス
○砂漠のスフィンクス
（を見る）
○スフィンクスの見る夢
○砂漠で見る夢
○丘の上のスフィンクス

苦しみや悲劇の証し
不幸
が現れていて
それは、美しいものでも
ある。

いつか
「スフィンクスの死」
を。
昇天していく
ような形

'08.7/27

'99.10/2

○美術史の上で意味
があるだけでなく、
もっと、どこに意味を
持たせようとしているのか、
それを明らかにする必要
がある。

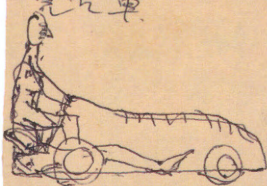
芸術は進歩
なんかしない。
はん囲が広がっていく
だけだ。
2002.9/24.

地図を持たずに
外国の知らない街を、
おもしろいもの、気に入る
店を探して歩くように
デッサンをする。見つける
のは大変だし、レベル
もバラつくが、新鮮なものに
出会える。'09.3/18.

アトリエは
迷いの場であり、
迷うから
道を探す。
'06. 7/25.

クローズアップに
リアリティーは
あるかもしれないが、
ある意味で、
それは、
リアリズムでは
ないと
言える。
「真珠の首飾りの少女」
を見て。
'06. 8/6.

Katsura Funakoshi

ライオン、豹顔の
「スフィンクス」は？
'08. 7/20.

'04. 12月・
耳長スフィンクスの目

右目、
目頭←→目尻 ≒ 2.7cm
瞳の上部巾 ≒ 1.4cm
└→ 下部は下まぶたにふれる。
瞳孔 ―― 目頭から 1.7cm

右目頭←→左目頭の間
右目尻←→左目尻の間
右瞳孔←→左瞳孔の間（芯芯で）

作ってきた作品
○山のような人物（大きさ）
○うしろ前の胴体（不統一）
○もう一つの顔
○ふたりで一つの胴体
○ヒョウとしての人物、
○野性・男性性としての人物（角）
○浮く形（？）としての女性像（月蝕）
○他者の手か、時間と位置の違う手か人物
○草食（不戦？）動物としての人物。
○人間を問い質す存在としてのスフィンクス
○糾弾する手を何本かもつ五本足のケンタウロス
05. 10/2

「作ることは、見ること。」
混沌を鮮明に
(新作の意味)

全球凍結
=
生命を爆発的に
大きく、多様に
進化させた
これは、美術にもあるか？

Harry Potter
AND THE CHAMBER OF SECRETS
NOT FOR SALE

'04
5/17.

・線の含むもの、線の伝えるもの。
・形を伝える線。
・正しい線を。
・線の地点。
・線の通る地点
・線の言葉。

試したい事を
試したら、
出来上がりの
細かい表情に
こだわるべきではないのか？
ホックニーのように。
'06. 8/9.

Katsura Funakoshi

「なぐさめ」なだけでは
芸術ではなく、
人間にとっての
新しい地平をそこに
指し示すものでなければならないが。
(明るい様な)
'04. 8/8.

もっともっと考えてみるべきだ。

90.1.12

日本のアーティストは「……どうあるべき」で動きすぎないか。

西洋のアーティストは「……どうしたい」で動いているのか。

95.7.1 5.30am

モーツァルトは理想の調和を、そしてバッハはこの宇宙、

あるいは世界の（「摂理と例外」）在り方を音で再構成したのだと言えるか？

法則が見えながらもそれで全てが解決しないこの世界。

神秘を含んだ摂理。

法則性と偶然性。

1990.2.4 1:00am

言葉に姿を与える事。

それが現実と食い違うことを恐れてはいけない。

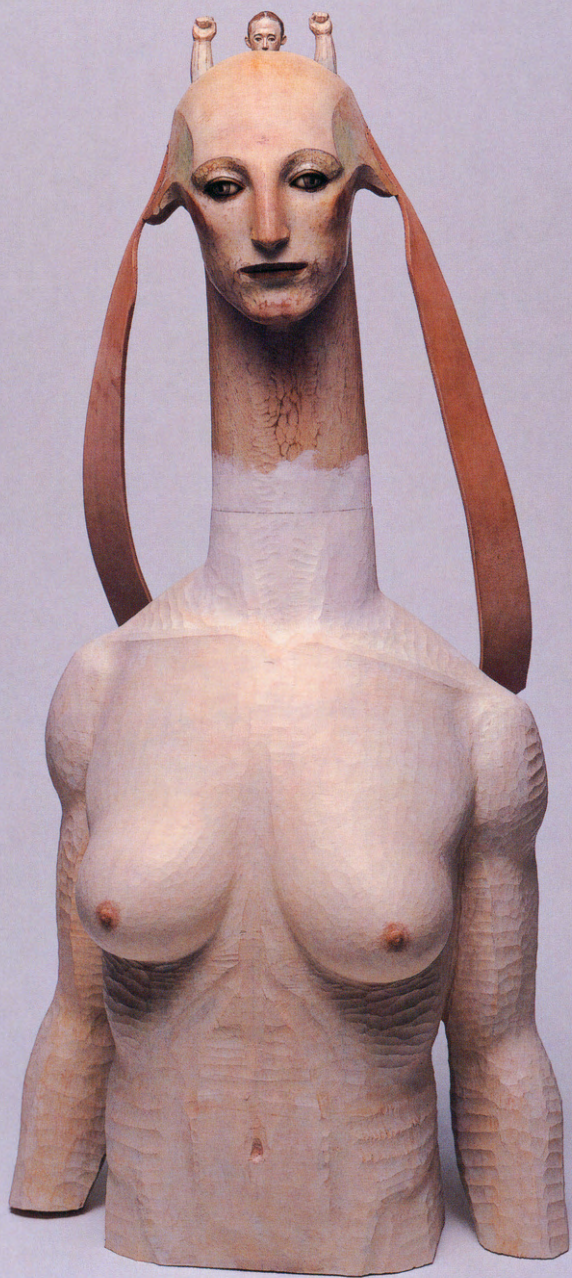
ケン・ラッセルの「サロメ」でおどるサロメが男と女の二人になったように。

私の作品に哲学的な何かのサインが現れてもいいのではないか。

人間しかやらない、人間にしかやれない行為、作業の残骸、組み合わせ。

けずる。みがく。彫る。さす。巻く。結ぶ。つける。

切る。はる。組む。やく。ねじる。

もしかしたらマーティン・パーイヤーはこんなことを考えていたのか。

1991.2.4

若江展のあと安斎さんがいっていた事。

「桂さんの作品は肖像じゃないんだから……」。

ぼくは広い意味では肖像だと思っている。

ただある人に似ていればいいなんて事はとても思えないが……。

だけど過去のどんな肖像作家だってそう思っていただろうと思う。

折りたたんでしまえて、

空気入れでまたふくらませる事のできる、ゴムの彫刻は？

一度作った立体に何かの素材を接着剤で張っていく。

そして着色。

タイトルから見える情景をデッサンする。

90.5.9

イヴ・クラインのブルー。

あの色は理論的にできたのではないだろう。

理論的に出させたのは「鮮やかなブルー」とかいった言葉でしかないと思う。

その言葉だけなら、他の人に選ばせたら、

違った色を選んだかもしれない。

あのブルーを最後に引き上げたのはクラインの眼、クラインの感覚。

90.8.26

美術の歴史を先につなぐというのがどういう事かよくは評価できないが、

とにかくまったく新しい世界を提示するという事には評価すべきだと感じる。

Quay　Brothers のようなもの。

でもそれはぼくが以前から感じていた

その人になりきればそれは必ず唯一であり、そしてそれは初めてであり、

とすれば必ず新しいという考えにつながっている。

ポートレート。ある個人を特定して語っていく事、

それが普遍的に人間について語る事になっていく、それはなぜか。

混沌としている事を鮮明に表す⇔「象徴としての肉体」

89.4.27

バスの中で思い当たる。

85.5

美術が、庭の飛び石のようにならんで見える時、

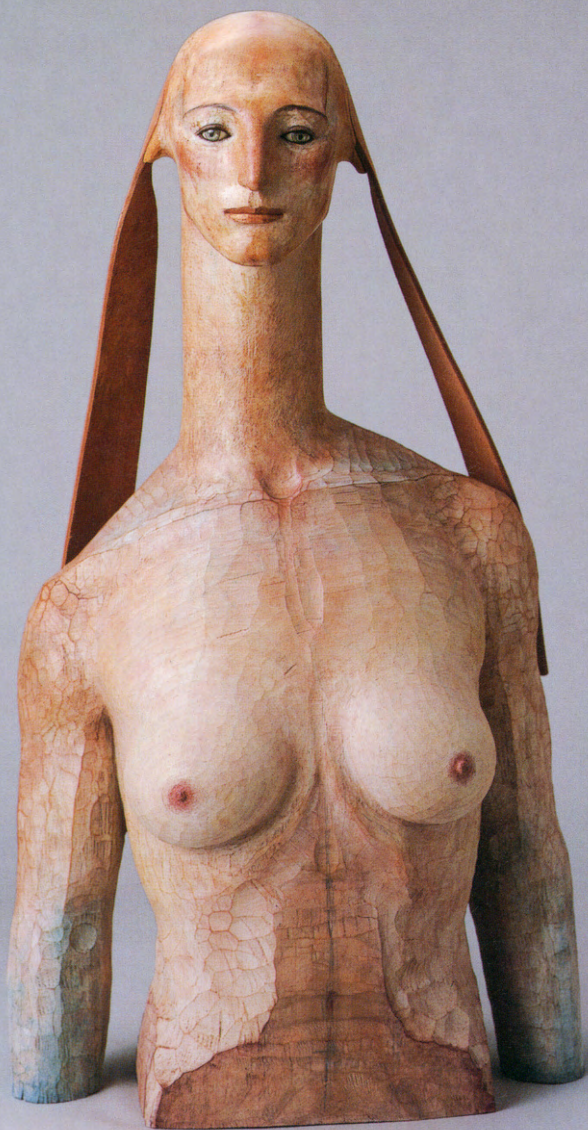
置くのを忘れられたような箇所にひとつ、

石を置き足しているのが自分のやっている事だと思う事がある。

新しい道を拓くというのではなく、

出来て来た道をうすっぺらなものにしないために、より幅のあるものにしたり、

その道にいろいろな味わいをちりばめる仕事もあると思う。

私はその辺の役割を果たしていきたい。

みすぼらしく、うすぎたない仕事場からも
美しい美術が生まれるように、
よごれた人間からもすばらしい芸術が生まれるかもしれない。
それは難解な救い。
そして人間に厚みを加えていると思う。

木（楠）の持つ抵抗感。石のように硬すぎず、もろくもない。
波長の合う硬さ。石のようにさわってない所は割れない。
ノミのあたっている所だけが切れる。

洋服の色。

白とか黒とか単純な色に押し込むのが何故なのか。

自分で把握していないが。

美術を見るのに記号、あるいは暗号として

読み取ろうとしかできない人たちがいる。

作品に深くひびきあい始めるのを待っていられないのだろうか。

初めてぼくの作品を見たときに、

その存在感に新鮮なおどろきを感じた人がすこしはいたと思う。

何度も見るうちにおどろきはなくなると思う。新鮮さはどうか。

おどろきはなくなっても、なおひきつけるものを出す事。

あるいは常に新鮮である事とは……。

さもなければいつも、いくらかのおどろきを備える事。

歴史にやり残しはないのか？

あったとしたら、そこの地点で、あるべきだったものを作り、

そしてそこから誰も拓かなかった古く新しい道が増えるかもしれない。

何故誰かが作った今の先端から始めなければいけないのか。

01.8.26

目や鼻や耳、口といった部分を、部分ごとにデッサンしてみるのだって、
心がまえによってはいいかもしれない。
いろんな角度からデッサンを鍛える。
そして良い顔、良いデッサンになっているかどうかに
おびえないでいられるかもしれない。以前手のデッサンを毎日したように。

芸術にとって自然とは型なのか。能などの型のように。神がつくりおいた型。
型を学んだだけでは表現にはなっていないのかもしれないが、
しかし、型、それを追いかける過程で型以上のものが
立ち現れてくるという面もある。

芸術はチューブから押し出される歯磨きのようなもの。
口からでた部分ががんばったりえらかったりしただけでは出られなかった。
チューブの中がいっぱいでそれが力となって一番出口に近いものを押し出した。

01.3.2

作品で自分を正当化するのではなく、つぐないとしての作品。

それとももしかしたらやはりそういう事は見るものをして、
気づかずに部屋などとの関わりで感じさせる方が得策なのだろうか。
もしもそれをやったら当然デッサンの意味は、中身は変わってくる。

98.5.10

シカゴで。
人によって作られたものは、全てある種の自画像であるならば、
自分の作ったものを人の顔にすべきではない。
技術を伴うものであってもそうだと思う。
その修練の時から精密機械作りの人の様に。
きっとその人の自画像になっているはずなのではないか。

ぼくが具象しかやらないのはやれないのだという事がわかった。
見えるものの中に美しいものを発見する目を持っているが、
言葉の構築や考えることができないからだ。考えられない人間。
視覚や映像がいつもないとだめなんだ。
こういう人間に観念の作品なんてできるはずがない。

鐘を鳴らせ！
俺は生きているんだ！

「答えはひとつではない」
とはよく言われること
だけれども
自分が作るものの答えも
ひとつではない。

（……他の方法はなかったか
と考えるのと同じ）

2002.
2/14

本から
はき出された
言葉がまゆになり
自分をくるみ始める
孤独な安らぎと静けさに
くるまれてゆく。
つつま

02.9.15.

仮説がなければ
実験はしないのか?

中村先生にきいてみる

ためらいもなく
⇕
こだわりもなく
'07. 1/25

ライオン顔
でも
泣かしてみる
?、
'06. 5/9

（戦争の）
嗅覚をすまし

'04.9.11

切花の回復
↓
○花びら以外を/時間
氷水につける
○ぬれ新聞でギブス

○つぼみを咲かせるには
葉の先を切る。

「グライダー」と「紙ヒコーキ」は
いつか タイトルになる
人が 発見しているべきもの
の遅れについて.
'06.2/6.

自分に火を放ち
火事にしてしまわ
なければ
ばか力は
出ない…

「巧詐は拙誠にしかず
(如)」

——たくみにあざむくより
つたなくても誠意をもって
なす方がすばらしい。

'06. 2/18

95.9.5

夏が終わる、私の夏が……。

96.12.7

制作中に形がより見えてきて、良くなっていく時、
それは自分が見えてくる、よりよくわかってくるような感覚がある。
正しい形を探す事は、自分自身を見つめること、探す事。正しいとは調和か。

妻を泣かせたり、子をさみしがらせたり。
良いものができないなら生きている資格がない。
私のいる理由がない。なくなってしまう。
１９８５年頃に思った。

91.5.24

混沌を鮮明に描こうとする。
前向きの顔と後ろ向きの胴体の作品の帽子。神父様の帽子がいいかもしれない。
私の中のムジュン、混沌、未決といったものは
宗教でも強く現れているように思うから。

手ぬいで修繕してあるスニーカーをはいている、男はいいのだ。

同じ一頭の牛から作られた２足のクツが電車の中かどこかで出会ったときに
それを察する事は、何者かに可能かどうか。

91.7.24

真夜中、住まいから少し離れた駐車場に車を止めて、
夜道を歩いて帰る。空を見上げる。
最近、曇り空を期待している。切れ目の多い厚手の雲がいい。
いろいろな形を見つけることができるからだ。
何かにたてがみをつかまれて必死に走り去ろうとする馬の頭部から胸まで……。
変な形に口をまげた目のひっこんだ、こちらが受け止められない程
何かを訴えている顔。それは空全体に広がっている
巨大な顔のアゴとその横の髪だったことに突然気付いて
見つけた事を後悔する程、怖くなったりする。
楽しみが夜中の帰り道に見つかって何年か経った。
あんな事ではっきりと目になったり鼻に見えたりするのに
私のデッサンはどうしてあんなにつまずくのだろう。

限りなく遠くを見つめる視線が、内に向かう視線と似ている事。
それは最も遠くにあり、わかりにくいものとして自分がある事。

ひと気のない歩道。
雪の日。
大通りが見える。
鳥の午後。
鳥たちの返事。
イスからの答え。イスよ答えよ。
自然科学の話。
生真面目なイス（足音）。
緑色の会話。
過ぎ去った音。
忘れるかもしれない。
長くつづくささやき。
きいたことのある声。
私の上の雲。
思い出をたたく音。
私を見下ろす雲。

これ以上のものが作れるかと不安がるより、
他にも持ってる自分の夢や
アイデアを形にしていく事。

何を何故作るかを説明しなければならないものと
そうでないものがあるか？
何を何故と正面中央突破するより
「こんな事、こんな所に気をつける」といった攻め方。

根本にしっかりとした世界・地球・生命などの思索があり、
その思索の経緯自体を形にし、思索の登場する事柄それぞれに
キャスティングするように具体物を与え、それを思索の構図に与える。

その時代が見える人がいる。
そして永遠を見ようとする人もいる。

館で繰り広げられたひと夏の舞踏会に
招待されたようだった。
2008年　東京都庭園美術館での個展。

2010.9.9

美しい人がいる。
美しく存在している人がいる。
私の記憶の中に美しい人が立ちつづけている。
人間について私が信じつづけたい事を信じさせてくれる人々が
時々私の前に現れる。
人が植えてくれた木のようにきざまれたその人たちの表情は
私の中で生きつづける。
彼らの表情は私を守る守護聖人のように、
あるいは血液の中の抵抗体のように、雪原のクレバスをあらかじめうめて進む。
守られた私は人間について信じられる事の現れた人間を造り出していくことで
私自身を勇気づけていく。あるいは許していく……。
その過程、あるいは結果が私の制作ではないだろうか？

遠い目の人がいる。
自分の中を見つめているような遠い目をしている人がときどきいる。
もっとも遠いものとは自分なのかもしれない。
世界を知ることとは、自分自身を知ることという一節を思い出す。
彫刻的なおもしろさをもった顔だというだけでは、私は動き出せない。
私が感じている人間の姿を代表し、象徴してくれるような個人に出会った時、
私はその人の像を作ってみたいと思う。

イタリア語の「ティラ・カンパ！」

鐘を鳴らせ！

俺は生きているんだ！

それを知らせるために鐘をならせ。

坂東夫妻に教わる。

好みに説明のつきすぎるいやみ。

93.6.24　新玉線

ダンガリーシャツやGパンのポケットに物をいっぱいつめた

アーティスト風の男の人。

違和感のあるものがある美。
体の中に盲腸があるような調和。
ブリキを使った足や腕を異なった形でつける。

人間がいる。
喜びを心の中にとっておいたり、悲しかったり、遠くを思ったり、
悔やんだり、魂を実感したり。

友みな吾を忘るる時に歌うべきうた。
山のような夜。
ボーヴォワールが死んだ。

1986.4.14

1987.7.17 Chartres

モンパルナス発　12：52　Chartres 着　01：39

Cathedral は駅から 10 分程のところ。

全部見えるところに立って正面の石壁の肌の荒れを見て、

800 年前に作られたと思ったら、心がゆさぶられるようだった。

ゴシックの彫刻が柱状に並んでいる。少し見てとりあえず中へ……。

しばらく立ち尽くした。ステンドグラスのあまりの美しさにおどろいた。

そして今入って来た入り口をふりあおいだ時「フランスのブルー」を見た。

ばら窓の右下「エッセの家系樹」。口で表現できないすんだブルーの輝き。

聖母の美しいステンドグラスがなかなか見つからない。

見つけた時にその衣の色にまた、おどろかされた。

あわい、あかるいブルーが光を白く放っている。

写真ではあんなだとは想像できなかった。

外回りを見る。ゴシック彫刻の代表的なものがずらずら並んでいる。

洗礼者ヨハネは切々としていてすばらしいと思った。

1987.7.18

マリとブランクーシのアトリエを見に行く。中年のおばさんが案内役。

ポンピドーの前。

アトリエといっても本当の場所から中身だけ移したので、

原型やイスや道具などがすこしよそよそしく感じられる。

30 分で出る。

少し歩いた所の画材屋（？）でこのノートともうひとつ買う。

タクシーをひろってもらって、ぼくだけパリ市立近代美術館へ。

パリ近美では 1937 年（？）だかの展覧会の時の作品を集め直して展覧会をしていた。

Soutine がいい。モディリアーニ、レジェは強く感じる。

ルーブルにゴヤの絵を見に行く。メムリンクは閉まっていた。

レンブラント自画像はロンドンのＮ．Ｇよりいい。

自分が居ることに対するつぐないに、何かを一生懸命にやる。

少しは彫刻を作らなければ生きる資格のないような自分。

彫刻をとったら、ぐうたらのすけべでしかない。

何もできなくなった人たちに、あらかじめ与えられる役目も絶対にあると思う。

個人はみな絶滅危惧種という存在。

06.1.25

新しいものは自分の中に見つけよう。

07.1.28

作りかけの自分の荒っぽいものをいっぱい放っておく。

観察によって見えていることと見えていないものを挙げよ。

ぬかりがないより手応えある作品を。

観察は対象に対する愛情であり、定着はその観察に力を与えることである。

試験の答案のような作品はまだ作品とは呼べない。なぜなら試験は設問者がいて、
彼が考えた問いであり、彼には答えが用意されている。
作品と呼べるのは自分が考えた設問があり、それに自分が答えたものであるはず。

コレクターはそのものが自分のものになったと思うべきではない。
それを大切に思う全ての人間を代表して預かっているだけなのだ。
美術品とはそういう類の「物」なのだ。
金を使った特定の誰かに属してしまうようなものでは決してないのだ。
それをわかっていない画廊とコレクターが多過ぎないか。

失敗した作品から、その問題を抽出し、それを克服するための勉強プランを作り、
そのプランを地道に解消していく事。

何も多過ぎず何も足りなくない完結したもの。
それはひとつの世界を成り立たせていて、小宇宙と呼べるものなのだ。
たとえそれがどんな形をとっていようと。

98.1.23

私は美しさに負けすぎる。美しさにたやすく涙が出過ぎる。

神の前では同じことかもしれないが、私たちが神になってはいけない。

01.4.1

トルソの腕。
有るものを「無く」作る。そして「無く」作ったものを、有るように見せる。
それは抽象だ。
だから、そこには「ここからは抽象です」という標識が必要になる。

幸福な瞬間を持つ事。それが時々ある事。
水の中には過ぎていった時間がたまっている。

要するに、それは一周遅れで、先頭に見えているものなのかもしれないぞ。

03.5.19

あの頃のうちの建物はもうどこにも残っていない。
貧しく美しかった我が家の一枚の写真に打ちひしがれる。
酒を飲みながら何か生まれるでもなく、
ただ心が吸い寄せられるだけで何もできずにいて、どこかが痛む。
過ぎていった顔はみんないじらしく悲しい。
写真は過去にあたたかい悲しさを与える。

ジャリと砂。
ジャリを集めろ
砂もわすれるな。
セメントだけじゃ向こうまで作れない高速道路。
通りを一本でもいい。今日中に越えよう。
明日じゃない今日越えよう。
どの通りでもいい。
どんな細い通りでも今日中に一本越えること。
それが大事なのだ。

多分そこには意味があると思うのです。理由ではなく意味はあると思うのです。

この世界の存在や私の存在など。

02.5

76.12.8

急に悲しくなった。

ほとんど泣いていた。

枕を抱え込んだ。

窓を開けた。

床に座ってベッドにしなだれかかって、うす目を開けてあいつを想った。

まつ毛のあたりに陽があたり、光っていて、ずっとこうしていたかった。

ぼくの彫刻の場合、あまり気づかれない事もあるが、
良いポートレートの中にも決して表れない、時間のズレのための
形のズレをしっかりと静かに入れて行く事。

夫婦が家を作り、二人で住んで子供ができて大きくする。
男の子もできてもっと大きくする。
大きくて楽しい家になっていく。
子供たちは夫婦に助けられながらひとつひとつ恋をする。
子供は一人ずつ新しいところへ出ていく。
だんだんに初めのように夫婦だけになる。
でも初めのように若いのは子供たちで、
夫婦には大きくしておいた家が残る。
考えてみると夫婦だけでいたのはたいそうに短かったと夫は思う。

どこかにいなくなるように、安易にフーっと動いて行ってしまう形より、
そこにい続けるもの。混沌の中にひたすら動き続け、
不可解で不鮮明にただ在るだけの確かさが、
在ったという感覚の記憶の自信の希薄な重さのみいたんだと思う。
在ったんだと思う。
残るのはそれだけ、そこにいた触覚だけが後の時間の名残り。

タルコフスキーの「ストーカー」。
人口３人の土地で宗教が形成されていくようなやりとり。

なめらかでたおやかな想いがひと休みしに来る。
悲しい目をした英雄が帰って来る。

アドルフの血にはアダムとイヴの血が流れている。

私は抱き合った時よりも新しい生命ができた時に動物になるべきだったんだ。

しゃべる事は楽しい。生きる楽しさかもしれない。

だけどぼくがしゃべる事は、結果として必ずといっていいほどうそになってしまう。

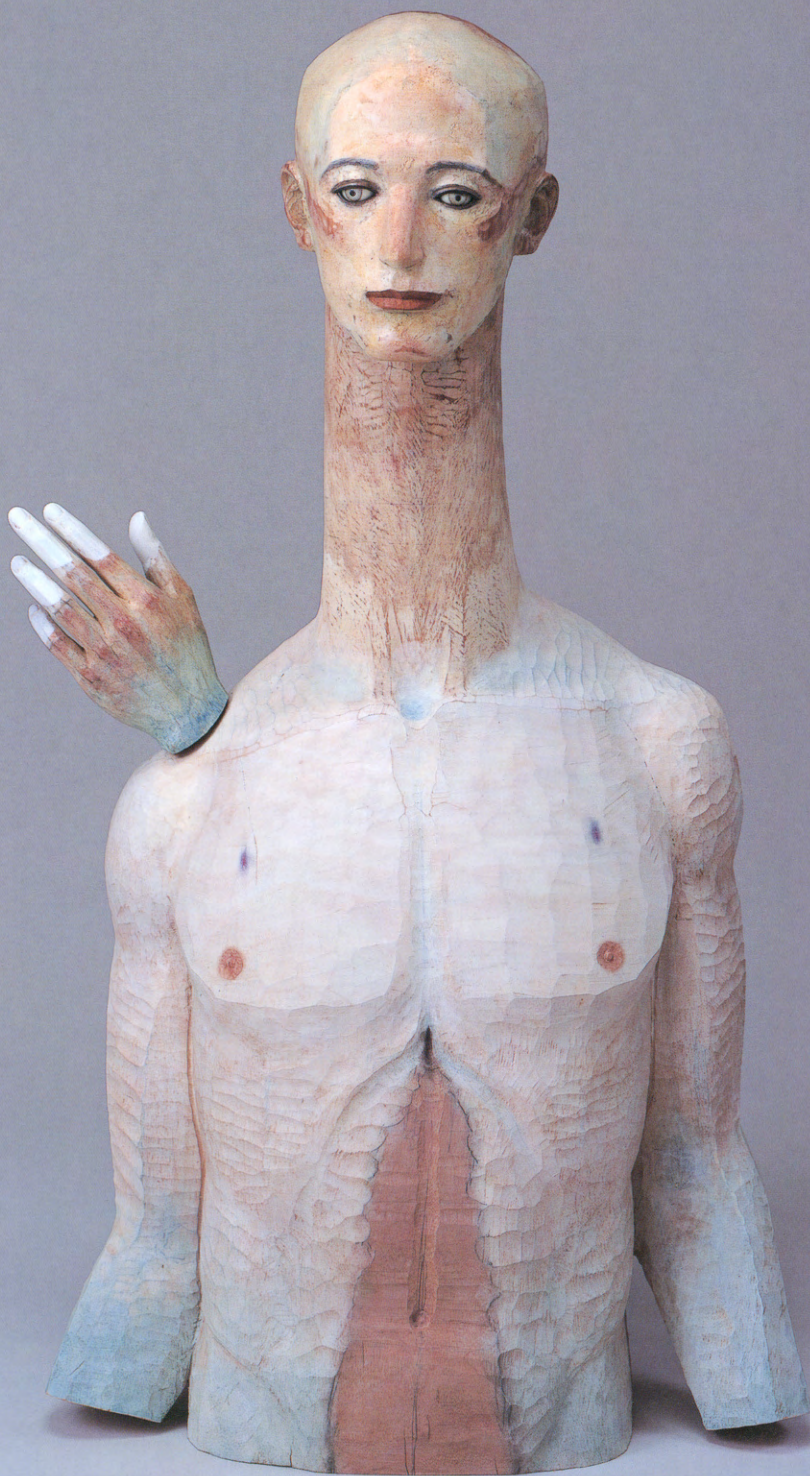
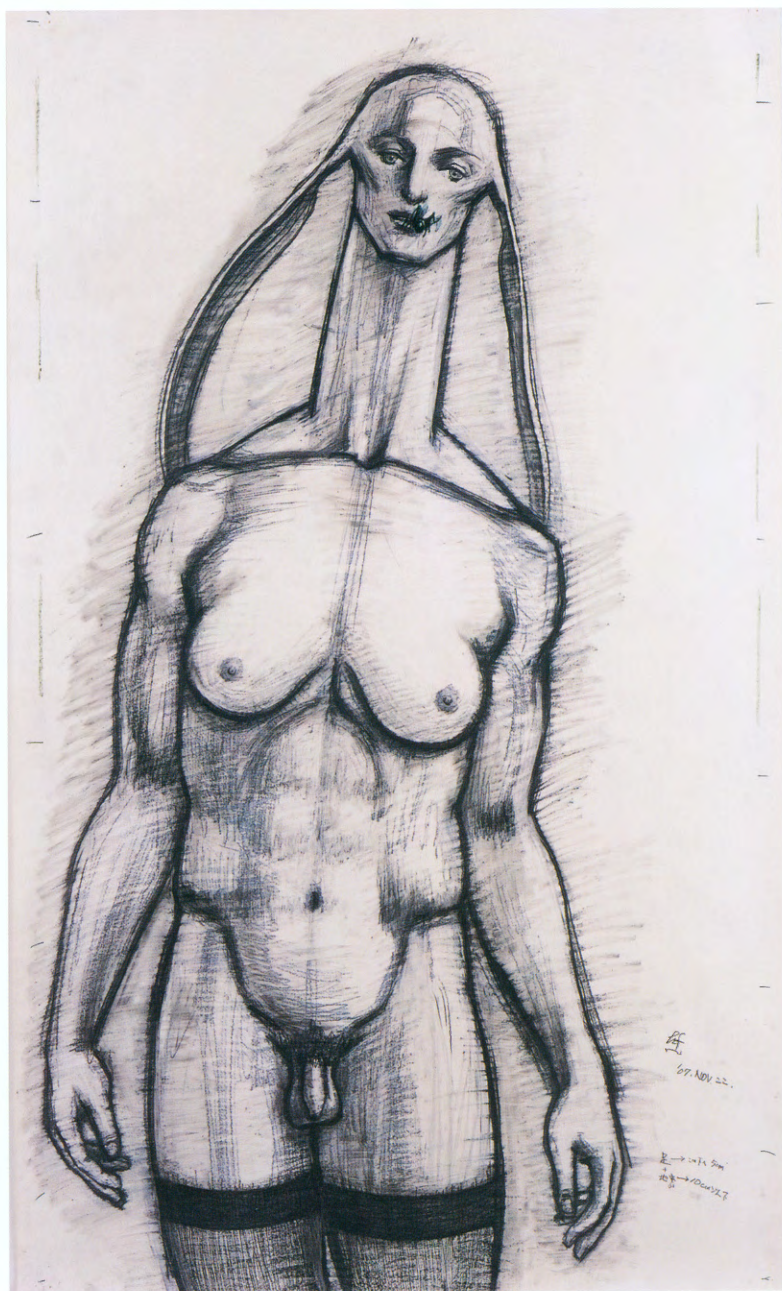
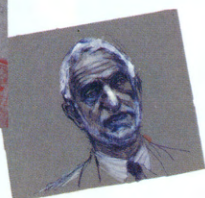
見直すだけの時間を使ったら話していられない。

死者は逃げない、弁解しない。

相手がしゃべらない時、人はこちらから必死にわかろうとする。

頭の良い人は時代を演出したり、順位を決めたりする。

いわば配車係。

車を動かすのとは違う。

99.
12/26

プルシャン・ブルー
ターコイズ・ブルー

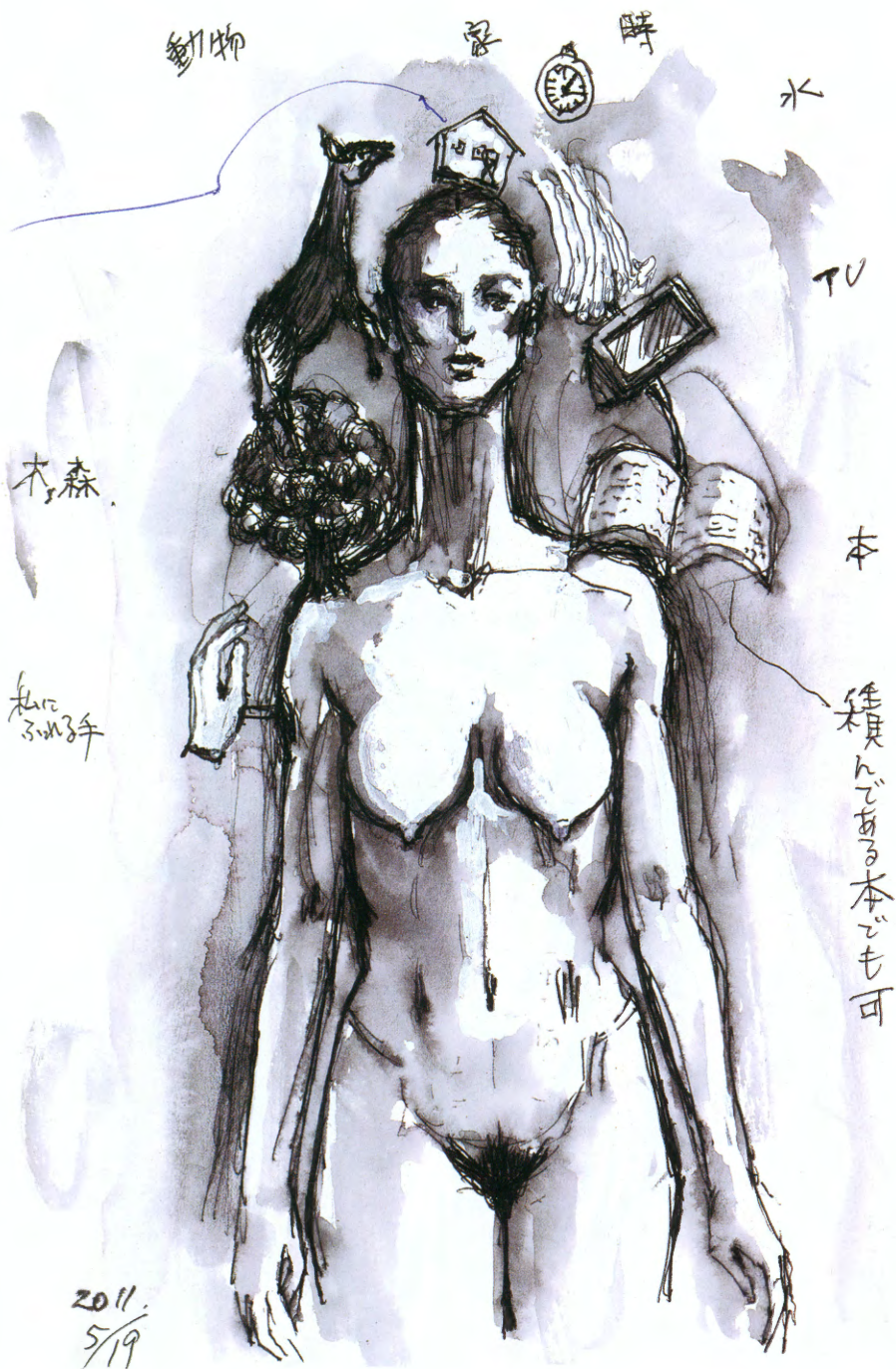
顔をひとつにできないか。

真上には
何もない方がよいかも？

肩に本
が あり その本から
その「ものがたり」のように
いろんなものが
立ち登る。

○家族
○友
○山
○夢（飛ぶ男）
○祈り、希望
○記憶、時計
○食べもの

○周縁関係
○スフィンクス
○酒ビン

動物
家
時
水
TV
木 森
本
私にふれる手
積んである本でも可
2011.
5/19

この肩巾は
いいかも。

これは
何だ？
花びらか翼か

'11.
5/16.

森の中のスフィンクス

（樹木の中の……）

Chapter 3

芸術は作られるのではなく
生まれるのだろう
私たちのやれることなど
そう大きなわけがない

家々、山々でできている頭部

近くの先生より
遠くの名作

アーティストのボランティア
↓
紙芝居はどうか?
一人一話
カンボジアや、アフガン
02.7/3.

'04.11月
月蝕の音をきく。

◎月蝕の音がきこえる

・夜をきく。
（聞）
・
・夜にかえす
・夜に帰る。 ヒョウ
・深い夜

◎夜の深さ

夜を受ける
夜を測る
〈眼〉
?

「角もなく草食の」
つける

顔への着色
↓
太いハケで奇異な色をぬってみる。

作品が変わっていくという事と
変えていくという事とは違う。
変えていくというのはその時時のテーマを選んでいる事だった。

人間の存在に
解釈を加え、
その解釈に
姿を与えた
という事だろうか?
「異形」について。 86 11/6

「水に映る月蝕」は
「心よ、世界の果てまで
飛んでいけ。」
という意味があると思う。
浮遊する形から。
2005.7/10
・心の自由
・解き放たれた精神

「政治家をわらうスフィンクス」
「国境をわらうスフィンクス」

◎題名のつけ方。
含まれていて
描かれてないこと。

水の中のソナタ
水のピアノ
水の底の音
水とピアノ
水のソナタ
水面の鍵盤
水の鍵盤

生命感を追う
のであれば、動物や
幼児でもよかったのだ。
私は、知性に
姿を与えたいのか？
（四捨五入のようだが……）
　　　　　　　　を言い方
'05.7/5.

人体彫刻を学ぶのは
夏目そうせきの「わが輩は
猫である」についての
論文を書くようなもので、
現象を写すだけなら
も刻でしかない。
自分の解釈がなければ
意味がない。
　84.6.5.

◎四角っぽい木のかたまりを積み上げたような
体の上にリアルな頭部
◎家の形の人物
　　　　体の

人の形って
特別なもの　だとは
思わないけど、
同種の人間にとっては、
常に捨てがたい
モチーフだと思う。
捨ててもいいのは
本当のリアリティーのないもの。
人に押されて出場するレース。

支えられた記憶
↓
立体（ミズマッチ）
手、うでによって
くるまれてる違和感
のある素材から で
　97.6.18

「作る」とは私にとってほとんど見ること
であり
今まで見ることのできなかった
何かを見えるように
すること、とも言えるの
かもしれない。
'03.3/11.

白くまだらかな　部屋
白くゆるやかな　記憶

影 —— ひとつの，ふたつの．

雪の影，雪の上の影　2002 3/14

「サブリナ」の
ジュリア・オーモンド
外斜視で美しい
（ジュリエット・ビノシュ風）

○言葉の届く
探す 受ける，待つ，
○言葉をつかむ手
○言葉を受けとめる手
○初めての道をゆく
追いついた言葉

バッハは完全だったの
かもしれない．
だけど，以後，数多くの
作曲家が，作品を
作り続ける．
これは，芸術が，今を生きる事と
何か関わりがあるってはないか。

ケント紙のえんぴつデッサンに，インクをかける！
○切りぬくのも…。

動物顔で
人間の体(裸)に
つながる。
肩越しに手が
ある。

'05，10/3．
見えてくる「人間の場面」を
書いておく。

ドゥッチオの
緑
肌色の中，部分
あるいは地色なりに
使うと，広がりがある．
おちつく。

Tolli P.A.での
夢で見た
くつと足．
他にも思いつけるか。
99．1.18

ぼくの
「異形」の意味は
もしかしたら，個の
相異を象なう
しているのか？
かけがえのない一人。
'05．6/3．

「水に映る月蝕」の他には？
・木の眠り．
・夜の眠りの木、
・森を眠らせ
・森をつつむ言葉
・森に浮く水

筆跡鑑定
↓
全ての人が違う字を
書くのか？だとしたら芸術
には．もっと可能性
があるはずだ。

Sea Turtle Association of Japan
http://www.umigame.org

一部こわれている
彫刻の美しいもの．
それを，一部仕上げ
ていない形で（四角い）
形で応用できるか？
マリツルになら似ないよう，
しかし，どんな意味が
そこにあるか？
↓
大きさを出せるか，
or，
意外性，
or
他の形の可能性．

文学上の
登場人物の
誰かを
空想で
デッサンしてみよ。

形体把握論的に
人間の形の表現を
探していくか，
存在把握論的に
形を与えて行くのか？
どちらが深いと
言えるのか？
'05．7/1．↓

・与えられた言葉．
・解読する手．
・思いを飛ばす羽
・手で飛ぶ
・思いを飛ばすための手
・飛ぶための手
・眠りの中の手．

「芸術とは何か」に迫ることと 村上君？
「人間とは何か？この世界とは何か？」に フロイト？
迫ることとの違いはどこにあるか？
'08．5/12

90.1.20

モティーフを何にとるかで悩む事はそんなに重要なことではないのかもしれない。
何かをモティーフに選んでしまったとき
私がどうそれを具体化していくかを興味を持って見続けられたら
それはそれでいいのかもしれない。というのは甘いか。
学校の課題のようにとびこんできたテーマからの作品は
現代美術にとって意味なしなのか。

90.5.22

バラードのような彫刻なのか。

等寸のデッサンをかく中で、もっとボディーの部分に研究がなされていい。
「その人が私のそばにいることについて」

1991.2.6.

ぼくの作品、デッサンともいつもなかなかキマらない。
もしかするとそのキマらないで苦労してあがく事。
そのあがきの残像がぼくの作品のアイデンティティーなのだろうか。
とすればうまくなってはいけないのか。それは何だか変。
やはり何かが見えていたらそれに迫る、あるいは「まだちがう」と言い続ける事。
うまくいこうと苦労しようといいものになる時もダメな時も確かにあるのだから。

94.12.2

芸術は作られるのではなく生まれるのだろう。
私たちのやれることなどそう大きなわけがない。

96.12.7

芸術というマグマがあり、噴火口を大小いろいろ持っている。
それぞれから噴き出るのは、マグマそのもののエネルギー、力なのだ。
作家は火口であり、口をまっすぐに柔らかくしておく。
マグマは地球の一部でもある。

90.4.4

描く前から仕上がりのわかっているデッサンなんて。
より高い何かを求めて動き回り、一度は迷子になり、苦しんで道を探し、
そのあげくに思い描いたよりも高い所まで昇っていたというものをつくりたい。

人前、人中でのデッサン。
最後まで、紙を見ないようにするのも、途中で位置を確認するのも良し。

91.7.21

ドガの作品集の中の巻末のデッサンの小さい写真をずっとルーペで見ていた。
オフセット印刷の網点がよく見える。
15ぐらいの点で眉ができていたりしておどろかされる。
点がにじんで大きくなり、となりの点とつながっていたり、
うすい点で点とは呼べないほどのものが均一にあったり、同じ濃さの点と思ったら
すこし濃くて肉眼で見るとそこがひとみになっていたりする。
しかしもっとおどろいたのはそれだけ少ない点の数なのに
描かれた女性の顔の形の強さや、気品や憂いまでが的確に現れていた事。
点は情報なのだろうと思う。そんなに少ない数の情報でも
的確な位置（強弱）を持っていればあんなに確固たる形を、あるいは世界を
白い紙の上にきずきあげる事が可能なのだということ。
ジョージ・シーガルのめ型の裏側彫刻＝作品の表も情報としてはあいまいなはずなのに
ある種のリアルさは確実に持っている。
それはいってみれば少なめの点の意味と同じなのだと思う。
ハンコを押していって人物の正面向きのポートレートを描く作家も同じことをやっている。

97.9.18

把握論と追体験。ふつうの具象作家と、ロペス・ガルシアや
ルシアン・フロイトなどの対比。
後者二人は把握論にとどまらず、
この世界をもう一度そのまま体験する方法をとっているように思える。

水はいかようにも形を変えそうに見えるが、決して自分の姿勢をくずさない。
状況に最も適した姿を保つ。
どこにでも行ってしまいそうだが、彼の望んだところへしか行かない。
そして必ず行き着く。

無理して新しいモデルを探すより、今までのモデルをまた作ってみる。
把握を変えたり、ねらいを変えたりして……。
ベルイマンの役者のように。

手で考えるという事はありえない。
だから言い換える必要がある。
手を動かしながら考えることと、
何もしないで考えることとの間には
何か違いがあるように思える。

ぼくの作る人間の顔が日本人らしくないこと。
インド人を作った仏像が日本人になっていること。
この二つの事実を共に認めうる考え。

ムーヴマンやポーズでからみ合った関係から表すことができるのは、
ある時のある状態に限られることが多いと思う。
日本の仏像などの配置は存在とそれを包む回りの空間を表しているのだろうか？
いかようにも対応できるあるいは対応する前の状態。

タイトルを決めるときの事。
「言葉と森の間に立って」というタイトルをつけた。
鹿を想い起こさせるような森の精のような顔、
あるいはもの想いにふける知性のような表情。
そんな事が作った私をよそに作品に現れて来て、私をとらえて離さない。

10年前、50年前の美術で古くさく感じるものがたくさんあり、
500年、1000年前、3000年前の美術で今見ても、
とても新鮮で美しく輝いているものがある。
そういう輝きをもったものにぼくはひかれる。何を追いかけたらいいのだろう。
自分の中の水の底に潜ってみるしかない。
ときどき無言の人たちが、ぼくに語りかけてくる。
地下鉄の中や外国のカフェ、ハイキングの山頂、通りすぎたバスの中。
その言葉をききとろうと静かに注目していると
彼らがそこに立っていること自体とっても美しく力強く見えてくる。
そしてそこに居る事自体がある種の言葉のように感じる。
何かを感じるので、何を言っているのだろうと耳をすましたりしたが、
期待した程はっきりとした言葉はききとれない。
もしかしたら、そうではなくてぼくが感じた事、あるいは
ぼくに何かを感じさせた人が、そこに立っている事そのものが
ひとつの言葉なのかもしれないと、今これを書き始めて思いついた。
あいまいな文だ。

ピカソやホックニーのやったことは、
人間を、この世界をどんな見方でみるのか、どんなスタイルで表現するか、
が常に絵の中にある。
私の山のような体のものや、顔二つや胴体後ろ前は、
人間精神をどう考えるかということになるのだろうか？

02.9.22

冒険心を学ばず、技術だけを学ぶよりは、技術はあきらめて、
冒険心とある程度の技術と感覚でものを作って行く方が、私には合っていると思う。
芸術はそうやってつづいてきた。
しかし私は冒険心としてはそれ程旺盛なわけではない。
先端冒険家とはいえない。
先端冒険家の顔をして、実は人の発想をいただいてばかりの人もいる。

彫刻としての空間の意識あるいは堅牢さ、または空間を制圧していることは、
私にとってひとつの枷かもしれない。
俳句の17文字が枷であり、力であり、道標であるように。

何らかの違和感を持ってくることで、人物彫刻の感傷をさけられるのか？
そういう意味も少しはあるのか。

05.7.5

あるいは私は人間がどんなものかなどという事は
全くわかっていないのかもしれなくて、
そしてそれなのに人間について私に語りかけてくる顔に時々出会う。
その顔を作ることで人間がどんなものかを知りたがっているのかもしれない。
「人間について考えているのですか？　その代表として私はここに来ました」と
語りかけてくるような人を時々見かける。
「私をテキストに人間を考えてください」

作品はいとも軽々と作家を超え、
すっと高い所まで昇っていくことがあるように思う。
何故そんなことが起こるのか。
神の力などとは言うまい。
そうではなく、そこにこそ芸術の神秘があるのかもしれない。
不思議な作品は作者の手や頭だけによらず、
自力で生まれてくるという面があるように思う。

03.6.16

聖母子像に関して考えた事。

・タテの線、タテの動きを強調。

・平面的な部分に立体的なものを組み合わせる。あるいは横切る。

それでキリストは聖母の体につけた。聖母の胸。

・なぜ私が作るのか、マリア様と私の中にある共通点は何か。

→ある種の不安、神の母になること。そこにおいてなら、不安なら
　私も共通点といえるかもしれない。しかし同時に神の事への安堵も。

・私たちとキリストの間のとりなしとしての聖母。

→だから聖母は私たちの方を見つめる。

キリストは聖母の体の上で私たちにつないだアミをたぐり寄せるポーズをとり、
　導くべき彼方を見すえる。

・タテの線や簡潔な形にするため、聖母の体は長いものになり、
　ひだは極力少なくした。
　またその形をより見えやすくするのに服の袖をなくした。
　そして丸たん棒に作った腕で体を横切らせて
　立体と平面的なものとの作り出す奥行きを表そうと思った。

マリア様という事でたいそう固くなっている。
静かさ、やさしさとかそういう事を
はじめから頭におさめ過ぎているのかもしれない。
そういう事でなかなか生き生きしたものにならないのかもしれない。
でも一番欲しいのは生命感とかいわれるようなものだろうか？
静かなおだやかな、やさしさからくる満ち足りた感覚ではないだろうか。
そう最終的には確かにそうだと思うが、
それを鮮明に感じ取れる作品を作るための仕事に携わっている時間には
もっと別な意識が必要になってくるのではないだろうか。
（ある感覚の場を観念的な構築性に後押しされながら作り出していく？）

夜、山の向こうに顔の浮かんだ雪景色なら屛風に描いてみたい。

06.6.3

00.11.7

上海スピーチ。

・新しいものは作っていない。

・人間の形、木を彫った彫刻、色を塗っている大理石の目玉を入れる。

それらの技法はみな何百年も何千年も前からある。

・それでも何か新しいものを作り出したい。

・私の感性をよく研ぎ澄ませれば、そしてリアリティーをみつければ、
　必ず私だけの表現ができると思っている。
　誰もしなかった表現ができると思っている。
　今までになくたったひとつのものは新しいと思っています。

木との偶然の出会い。

大学院の時に木彫の聖母子制作をたのまれた。

２ｍ以上ないとその場に合わない。木彫はほとんど初めてであった。

（日本の）楠を選んで彫り始めた。

荒彫りから少し丁寧になるあたりで楠の魅力を感じ始めた。

ぼくにちょうど良い抵抗感をもった木だった。

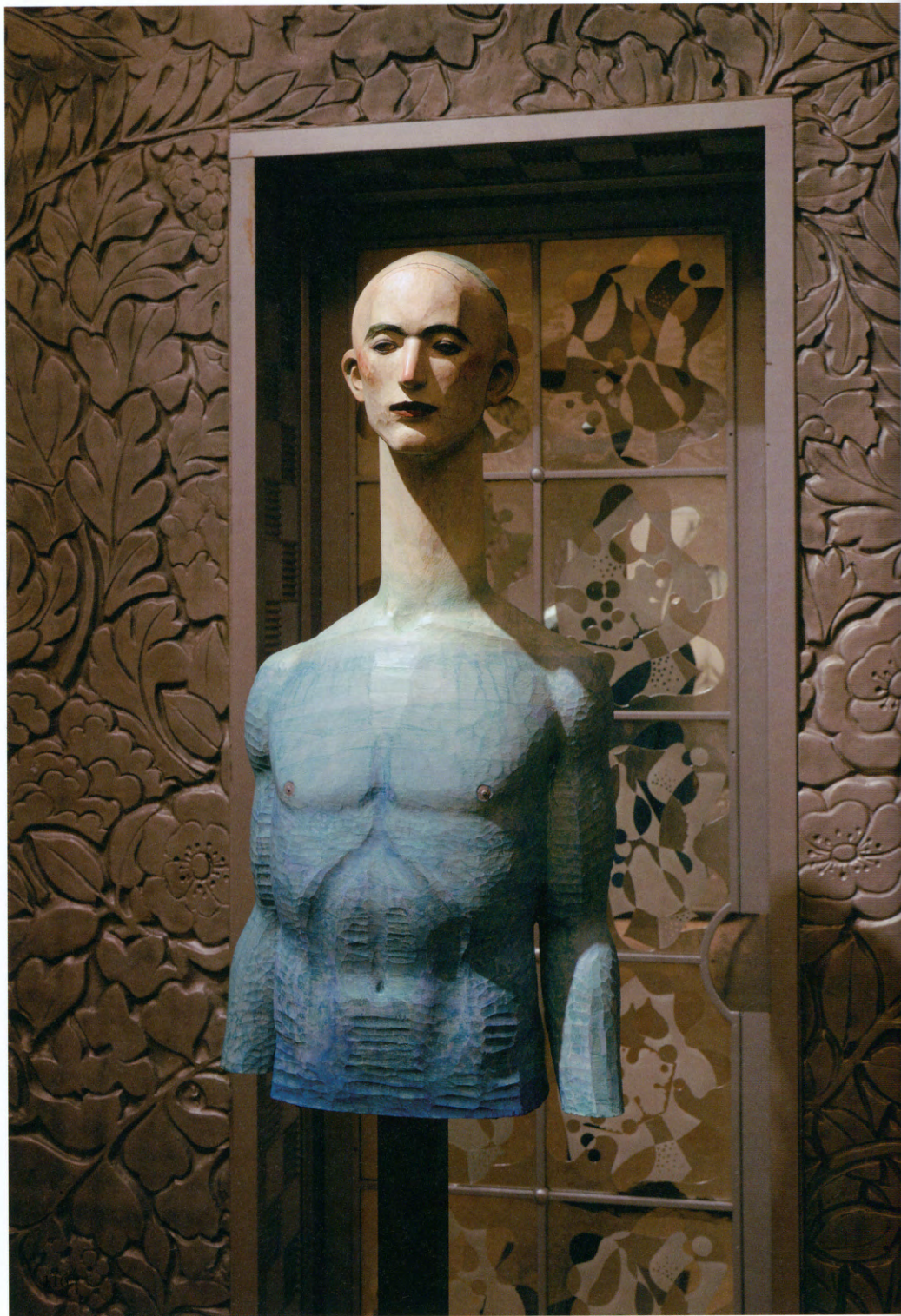
硬すぎず、柔らかすぎず、目がつまっていて少し磨くと硬い感じになる。

のみで切って行く時に気持ちがいい。また楠の色が好きだ。

少し緑っぽい筋もあるが、あつくるしくない透明感があって着色を拒まない。

楠という素材はぼくの今の作品には重要な条件なのかもしれない。

違う材で彫ることに不安がある。

人間がそこに居る。
私のそばに居るというような実感のもてるものを作りたい。
見つめながら心の中では対話ができるようなものを作りたい。
そばにいるような感じになるためにはどうしてもある程度リアルさが必要だった。
だけど表面のリアルさを追求するつもりはなかったし、これからもないと思う。
最初にああいう切り方の胸像にした時はほとんど意識はしていなかった。
ただどうしても頭部と体のバランスをああいう形で作ってみたかった。
何かができそうに思った。後であのバランスには何かあると思った。
あのバランスになった時に初めて感じられる存在感があると思った。
頭像の時はもっとその人（モデル）の内面のようなものが、
多く強調されるだろうし、肩ぐらいまでついても「そこにいる」という感じは出ない。
では全身像はどうなるのだろう。
今のところぼくにとってはいろいろと要素が多すぎて
多くをしゃべり過ぎるように思える。
ある個性が目の前にいるというより、人類の代表が
ひとりで立っているというような要素が多く入ってくるように思える。
だけど、そのうちきっと作ってみるだろうと思っている。

私の作る彫刻ではその像（人物）の持つ個性のようなものが大事だ。
なにか内面から輝くようなものが出てこないと満足できない。
モデルがあったりなかったりするのだから、
見た事のない人の個性を作ったりもする。その時私は何を選んでいるのだろう。
自分でもその辺の事ははっきりわからない。
きっと人間の存在の美しさのようなものが現れてくるまで、
食い下がって制作しているのだろう。

私の心の中に見える人間が生きて行くシーン。
いろいろな人たちのさまざまなシーンが目に浮かぶ。
そして、その枝のようなさまざまなシーンを忘れてしまわないように
気をつけながらそぎ落として行くと、木の幹のように残るのは
シーンを呑み込んだまま黙って立ちすくんでいるそれぞれの人の姿。

人間の存在がいる。
部分だけでなく存在そのものを感じられる形にしたい。
そうするとなぜか黙って立っている形しか見えなかった。
動きの記憶や変化の兆しを内に持ちながら、静かに想いと共に立っている人間。
そんな事々を目に見える形にしたいと思う。

ぼくがそういう考えで彫刻を作るのに最も適していると感じたのが木だった。
木に着色してみた時、永いこと探していたもの、それがどんなものか
はっきりわからないのに、見つかったような気がした。
声も出さずにぼくに見つけられるのを待っていてくれたように思った。

数多くの枝があった事、花が咲いた事、それが散った事、緑だった葉が秋に落ち、
冬に冷たい風が襲い続け、春を思って我慢した事。
そんな記憶と思いと予感のようなものを感じられる人間の形を彫刻の中で表したい。
それは私をなぐさめる。

不誠実だが、魅力のある作品──のままではいけない。
不誠実ではあるが、感性を研ぎ澄ませた良い作品は成立するか？

作品は作家によって作られるが、芸術あるいは傑作は自分で生まれる。
芸術家は、芸術を目指すもので、作品がいつも芸術とは限らない。

おなかの大きい作品。
人間の存在の不思議さや神秘。
大きさ？
異形？
それを何か鮮明な形にしたかったのか？

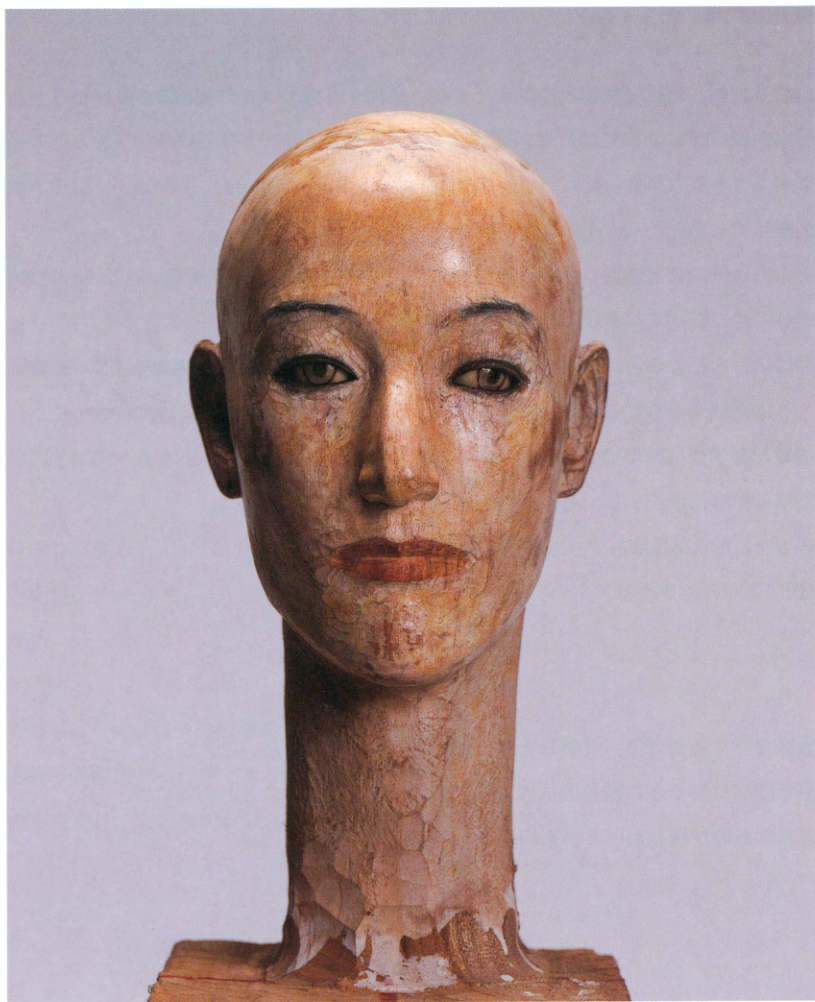
03.2.27

アメリカが新しいものを生むほどに証明しているのは、
それまでのアメリカにいかに何もなかったかということなのかもしれない。
だからもしかすると、ある時点からアメリカは新しいものを生み出せずに
伝統芸になっていくかもしれない。
表面的には「新しい」と思えるようなものを生みつづけている形をとりながら……。

02.1.2

登山家のように、登頂した前人のものとは違うルートを探さなければならないはず。
登山家は？
アーティストは……？
誰とも違う自分を立証するために？

00.6.26

木の細胞。
皮の内側が最も若く、中心に行くに従って老いていて、中心部は死んでいる。
外側の細胞がどんどん次の世代を生み出して行く。

宗教さえも、組織になるとゆがんでくる。平和を目指すはずの宗教が、
国家の戦時下においては反戦の意思表示さえしなくなったりする。
戦おうとする力が強い時にそうなる。
組織になったとたん、それは力を生み、
その力は他の力と影響し始め、自由を失う。
そして時に表明すべき状況で沈黙し、神のように振る舞う。
神はほとんどの場合に沈黙を守る。人間からみると神には言語障害がある。
それは組織だからなのだろうか？
組織が自ずから持つ弱点なのだろうか？
だから組織に所属しないものは強いのだろうか？
もしかしたらそこにもアートの意味はあるのか？
(個であり自由であるアート)

02.1.15

仮説を立てるだけで、分析したり、結論を出したりできないことと、
分析能力はあるが、独自の仮説を立てることのできないこととの間には
どんなものが横たわっているのか？

04.6.18

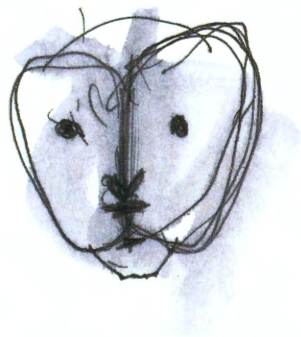
どっちが必要なのか。
形をとらえている事、見える通りに手が動くことと、
紙の上にひとつのものが出来上がることのうちの。

「ねらい」ばかりが見えすぎる事！？

一度作ってみる。
いくつかの方向性の群に分ける。
群ごとに向きを変え（視点を変え）
デッサン。
ひとつの顔として。
方向性、ムーヴマン。
視点。

もうしばらくは自分の好きな顔を作っていよう。
そのうち無理なく我慢できなくなるだろう。
力がたまり、次のものがはっきり見えてくるだろう。

思いよ世界の涯(はて)てまで飛んでいけ

思いよ 世界の涯てまで
飛んでいけ。

銀座　「寿司」で
少し乾いた寿司を出されて、
「おいしいね！おいしいね！」と言って
食べていたという、小さいみもの
話をきいた。
コリカから今日初めて
胸がつまる。
'09. 10/27.

子供の頃に、
平田神父が話してくれた
何んだかやんちゃな
棒っきれの話は、
「ピノッキオ」から
きていたのだろうか？
'09. 2/16.

歴史が~~通過~~停車

し忘れた~~地点~~駅

から　たどり直す。

'06. 2/11.

横断歩道の

白はどんな素材

か？

ドイツで

鼻をすすっては

ダメ（最悪マナー）

2001.
1/15.

死は誰のものか？
どこに属するのか。
死んでいく者だけのものとは
思えないところがある。

ボクシングの亀田3兄弟の
父親は息子たちに謝った
のだろうか？彼は息子たちに
謝るべきだ。「謝ったら敗
け」とか書いているらしいが、愚か
な考えだ。そもそも、親は
いつの日か子供に敗ける
ところをしっかりと見せるのも
ひとつの役目なのかもしれ
ないと思う。ある種の敗けを。

'07、10/27、

神は
舌足らず
の
言語障害が
あり、その言葉を
聞く人、民族に
よって、異った
内容を受けとって
いる。

'08.7/21

わかることと。
知ることの
違いの
大きな
恥

'98.
5/19.

年をとるとは、
はずせない仮面を
つけるようなもの、
その面は年々、厚さを
増す。

'09.
1/21

POSTCARD

空を飛べたことのある男のストーリー。
今はもう空中を飛ぶことができない。
何故飛ぶことができたのか、何故飛べなくなってしまったのか、
彼にはその理由がわからない。
ただ与えられ、そして取り上げられたのだ。
時には、彼自身、飛べたことさえも信じられなくなってしまう。
しかし、彼の回りにはかつて彼が飛べたことを物語るものや、記憶が、
よく見るとかすかに残っているのが解る。
今の彼は、決して、美しく年を重ねたとは言えないかもしれない。
しかし、彼には、かつて美しく、誰のものとも違う美しい時と、場面があった。
それは、死んでしまった者たちと彼と神だけの秘密の宝物なのである。
彼がひとりで飛べたばかりでなく、
彼は彼の乗っている乗り物全てを空中へ飛ばす力があった。
ぶら下がった風船でも馬でも、遊園地の機関車でも、博物館の飛行機も……。
そして木登り中の木さえも電線を越え、家の屋根も越えて飛んで行く。
彼が、自分自身で飛ぶ時は、また、いろいろな形で飛ぶことができたのだ。
今はもう全てを思い出すことのできない彼にも、
いくつかの飛び方の記憶が残っている。
空気の中をすべっていく感覚が残っている。

結論のない認識論。
気がついたら全ての言葉に疑問符がついて
おれの脳味噌は中空を片足で舞い狂う。
いつ終わるのかはわからない。
とにかく歯ぎしりがアキレス腱を走り回り。

あの子供たちが大きくなった時、ぼくたちはなぜ生き残れたのだろう。
誰かが食べ物を持って来てくれた、誰かが水をくれた、誰だったのだろう。
知らない人だったと思う。
あの時しか見たことがない、あの前もあの後もその人を見たことがない。
知らない人がぼくたちを助けてくれたんだ。何故なのだろう。
放っておいてもあの人たちは生きていけたのに。
ぼくたちが今こうして生きているのは
遠くにいる一生会うことのない知らない人たちがある日、
一日眠らずに歌い続けてくれたからだって聞いたことがある。
今ぼくたちは元気な大人になりかけている。
いつの日か、あの時のぼくたちのように
誰かが飢えて苦しんでいるのを知らされたら、
ぼくたちは何かしてあげられる人間に自分を育てておこう。
会うことのなかったあの人たちのように。
その子たちはまぎれもなくぼくたちなんだ。
そうでなければあの人たちがくれたものがぼくたちのところで
止まって消えてしまう。
あの人たちがもういない人たちから受け継いでぼくたちに与え、
これから生まれる人たちに示した事、それをぼくたちで終わらせたくない。
あの人たちに何度もありがとうというより、ぼくたちがあの人たちになるんだ。
Band　Aid を見て

はじめに言葉ありき⇔はじめに希望ありき。

昨日を静かに閉じる事が飛躍には必要。

すごい物を作り上げているその人の古典性はどこに置かれているのか。
その人はどこに自分の基盤を置いているのか？

82.11.8

西村画廊が個展をしないかと言ってくれた。ショックだった。
足が震えるようだったし、胸はドキドキ、頭に一発食らったよう。
昨日タックルした時よりきいた。
一瞬で全てを飲み込み、ただちに整理がつかなくなり、早く出たくなった。
企画がどうかとか……。
それよりどういう事なのか訳がわからなくなった。
ホックニーとかフロイトらのやった画廊でぼくがやるなんて信じられない。
ニューヨークが急に近づいてきたような気がして、また、映画の出世物語が
ぼくに起こったみたい。（中略）ショック的なうれしさだけど、それだけに
これからどうなるか不安だ。本当にそんな事になったら変化が起こるようで怖い。
自分の底の浅さが見えるような気がする。（中略）
でも本当に自分のやりたいことをやっていて良かったと思う。
木彫へ行けて良かった。（中略）ああ、頭ごちゃごちゃ。

98.12.13

マリのところでピエール＆ジョジョ、レスタニ夫妻と食事。
マリの天ぷら大変おいしい。
まいたけのようなキノコ、にんじん、いんげん、白身魚、たまねぎ。
前菜のきゅうりとエビも美味。
きゅうりをすこんぶ程の大きさに3㎜程の厚みで切ったものを、
塩もみして手でしぼり、にんにく少し、しょうが少しと混ぜたものに
茹でたエビをのせる。
レスタニ夫妻はぼくの作品を好きだと言ってくれた。
そしてデービッドの3箇所程のヨーロッパの個展の計画を
パリでやったほうがよいと言ってくれる。
Jean もそのために、ジュード・ポムにあたるから
デービッドに TEL するように言ってくれた。
レスタニ氏は思慮深そうなゆっくりとしたサンタクロースのような人。
奥様は元気のよい、どんどん自分の意見を言うへビースモーカー。
レスタニ氏は食後に葉巻を吸う。
彫刻の賞をビデオの作家にあげたことについてジャンは意見をし、
レスタニ氏に議論していた奥様は
彫刻したような形の顔をしている面のハッキリした顔立ち。

90.3.30

械がせっかくおぼえたトランプの手品を

ぼくはたった１回だけで無神経にも、必要もないのに見破ってしまった。

械はがっかりしたような、かといってそれを隠すような表情でいってしまった。

械にとってあの特殊トランプは突如として

つまらない無意味なものになってしまっただろう。

ぼくがそうしたのだ。

なぜ手品のネタを探す必要があったのだろう。ばかな事だ。

また取り返しのつかないことを彼にしてしまった。

これは彼のやるというイジメよりひどいことだ。

械と散歩をしよう。

一緒に道や木や影、空き地、どぶ、落ちている物などを見て歩こう。

時間を決めて、目的地なく、車で走り、時間がきたところで車を降り散歩する。

５０年程眠る（眠りたい）。
風のある部屋（吹く部屋）。
部屋の中の向かい風。
息を止めて。
冬の立会人。
駅の中の空虚。
中央駅の期待。

空中を飛ぶ夢。
飛んでいると思い込んでみて道を歩く。

ベニスの板（道板）
板がぼくを呼んだ。
大黒くんにも声をかけていたが、板は最後にぼくを選んだ。
（板が最後に選んだのはぼくだった）
ぼくが板を発見したといった方が本当に正確なのかどうか言えなくなった。
今、思い出してみて、ぼくに見える入り口のわきに横たわった板は
確かに明るく浮き上がって見える。
そういう時、そのものは本当に光を発していたといってもいいのかもしれないと思う。
ただ、その光なり、呼びかけなりをききとるためには、
ある状況の準備がなされていなければならないのかもしれない。

人間の心の中がだんだんわかってくる、というのは大人の心の中についてであり、
子供の心の中の事は忘れていく事が多い。

最近父はアトリエのカギをしめて眠る。
眠っていなくてもしめている事がある。
子供達がまだ父母の羽根の下にいて父が若かった頃、
そのようなことはなかったように思う。
子供達が次第に去って行き、
子供でさえもなくなって行く近頃になって始まった習慣のようだ。
人は夜泣く。父も泣くかもしれない。

祈りとは自分の中の清らかなるものを己が表面に浮上させること、
ということがいえるのではないだろうか。

98.11.20

生まれるということで受けた恩を、
死を体験することで返してチャラになるのだろうか。
それとももっとほかに何かあるのだろうか。

03.6.16 zozoの通夜の日

87.3.3

コリカ、械、みも日本へ帰る。金ちゃんとぼくとで送った。
タクシーでHeathrowへ。その中でコリカから聞かされた事。
械がロンドンの生活を「こんなだとは思わなかった」と言っていたとのこと。
ショックだったけど、無理もないと思った。
ぼくは械に何をしたんだろう。しかりつけただけ。少し一緒に遊んだ。
械には興味のない所を引きずり回しただけ。
一度しかサッカーをしなかった。スケートにも連れて行かなかった。
劇もミュージカルもコンサートも行かなかった。
映画は「バジル」と「E.T.」だけ。

自分の感受性が自分の作品に殺されて行く事ってきっとある。
うまくできた自分の作品が技術的に自分の制作をひっぱり始める時、
そしてそれは技術的なことにとどまらず、感受性をも束縛していく。

98.5.5 ごろシカゴで。

おれの考えは隕石のようなもの。
向こうからやってくるのを感じるとおれの引力が作動して、
無理やりおれの地平でつかみ取る。おれの考えとはそんなもの。
何かが飛んでくるのを待っている。

夏の終わりを認める事には、
少年の自分への惜別の覚悟ともいえるものがつきまとっている。

最小公倍数でありながら、最大公約数でもある存在としての個人。

手順をくずさないでやってみる。
流れにそって、手順を終えて手をおき、気に入らなければもう一つ。

聖性とエロティシズムの同居？ 03.3

何人も替われない人間が生きた証拠。

死は誰のものか？
どこに属するのか。
死んでいく者だけのものとは思えないところがある。01.1.15

本からはき出された言葉が繭になり、自分をくるみ始める。
孤独と安らぎと静けさに包まれていく。02.9.15

「答えはひとつではない」とはよくいわれることだけれども、
自分が作るものの答えもひとつではない。02.2.14

自分に火を放ち、火事にしてしまわなければ、ばか力は出ない。

混沌と調和と両方ともが見える。
混沌を鮮明に見せた上での調和？ 03.3.19

誰のでもない自分の人生を生きるように、
明解に鮮明に自分だけの世界を造り上げること。
私を生きたのは私ひとりなのだから。

簡単な方法を探すのではなく、難しい熟練と深さを自分に足すと考える。

あと30年もすれば終わる。99.5.28

私たちにできることは、首をふること、うなずくこと、遠くに向かい手をふること。
私たちにできることは地団駄を踏み、歯ぎしりをし、涙をこらえ、抱きしめること。

械を迎えに行ったらひとりだけさびしそうに立っていた。
他の子たちは紙袋にいっぱい、紙箱で作ったおもちゃやトラック、
カメラ等をもっていたところ。
お店屋さんごっこでそれまでに作ったものをみんなで買いあった。
械はさびしそうだった。何も言わなかった。
「誰かが間違えて持って行っちゃったのかもしれないね」と言ってもだまってる。
先生は「そんなことはないと思う」と言う。
結局、械は何も持たずに帰った。
夜中にその話を聞いた。
ぼくはたまらなくなって同じものを作ってやると思った。
そして、トラックとカメラと双眼鏡を作った。
作り終わったら４時ですずめが鳴き始め、薄明るくなってきた。
８時に起こせ、とそしたら械君の作ったお金で売ってやるってメモを書いた。
朝８時に起こされ械に売ってやった。
うれしそうに買い物をしていた。(中略)
そしてもうひとつのこと。誰かが持って帰っちゃった、ではなくて
お店屋さんごっこはそれが終わったらおもちゃはみんな
元の人のところに返すのだと思って全部返しちゃったらしい。
だから昨日何も言えなかったのだ。全てがわかったのだろう。
どうして自分だけ何もないのか。そしてもうどうする事もできないという事。
たださびしくて悲しいだけ。(中略)。
昨日、思いつきで作ってやってよかった。
すれすれのところで械の気持ちを少し救ってやれたように思う。(中略)
昨日の事、械にとっては井上靖の言う「確実な喪失感」だったかもしれない。
親の大げさかもしれないが。

舟 越 桂 略 歴

1951	岩手県盛岡市に生まれる
1975	東京造形大学彫刻科卒業
1977	東京芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了
1985-86	東京芸術大学彫刻科で教鞭をとる
1986-87	文化庁芸術家在外研修員としてロンドンに滞在
1988	第43回ヴェネツィア・ビエンナーレに出品
1989	東京造形大学彫刻科で教鞭をとる（現在に至る）
1990-91	東京芸術大学彫刻科で教鞭をとる
1991	タカシマヤ文化基金第1回新鋭作家奨励賞を受賞
1995	第26回中原悌二郎賞優秀賞を受賞
1997	第18回平櫛田中賞を受賞
2003	「舟越 桂 Works:1980-2003」
	東京都現代美術館他5館巡回（～'04）
	第33回中原悌二郎賞を受賞
2009	第50回毎日芸術賞を受賞
	第59回芸術選奨文部科学大臣賞（美術部門）を受賞
2011	紫綬褒章を受章

主なパブリックコレクション

愛知県美術館
石巻文化センター（宮城）
岩手県（いわて情報交流センター）
岩手県立美術館
ヴィスバーデン美術館（ドイツ）
ウルト美術館（ドイツ）
岡田文化財団パラミタミュージアム（三重）
鹿児島県霧島アートの森
カトリック逗子教会
金沢21世紀美術館
久留米市
高知県立美術館
国立国際美術館（大阪）
札幌芸術の森
資生堂アートハウス（静岡）
聖アンデレ教会（東京）
世田谷美術館
高松市美術館
長泉院付属現代彫刻美術館（東京）
東京都現代美術館
徳島県立近代美術館
栃木県立美術館
富山県立近代美術館
トラピスト修道院（北海道）
中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館
中山峠写真の森美術館（北海道）
名古屋市美術館
西日本シティ銀行（福岡）
広島市現代美術館
ヘス・アートコレクション（アメリカ）
北海道立旭川美術館
マックマスター美術館（カナダ）
メトロポリタン美術館（アメリカ）
メナード美術館（愛知）
ルートヴィッヒ美術館（ドイツ）

作品クレジット

Chapter1

P11 もうひとりのスフィンクス
2010

P13 雪の上の影
2002

P15 見晴らし台のスフィンクス
2008

P17 水に映る月蝕
2003

P19 夜は夜に
2003

P21 言葉をつかむ手
2004

P23 スフィンクスの話
2004

P25 山と水の間に
1998

P27 森の奥の水のほとり
2009

P31 戦争をみるスフィンクスII
2006

P33 森に浮くスフィンクス
2006

P35 急がない振り子
2010

Chapter2

P43 肩で眠る月
1996

P45 黒い山
1994

P47 本の中の水路
1994

P49 水をすくう手
1994

P51 月から降る雨
1994

P53 バベルの空
1994

P55 午後の青
1992

P57 風の日のスフィンクス
2005

P59 動く水
1993

P61 野の印画紙
1993

P63 水の中で
1991

P65 水の上の振り子
1991

P67 さなぎを舞う
(踊り手へのオマージュ)
2001

P69 耳を澄ますスフィンクス
2007

P71 本の中の水路
1994

The gallery

P74 戦争をみるスフィンクスII
2006

P75 山と水の間に
1998

P76 見晴らし台のスフィンクス
2008

P77 森の奥の水のほとり
2009

P78 長い休止符
1993

P79 月蝕の森で
2007

P80 伝えられた言葉
2006

P81 雪に触れる、角はもたず
2007

P82 DR0828
「バッタを食べる
森のスフィンクス」
のためのドローイング
2007

P83 DR1027
「森の奥の水のほとり」
のためのドローイング
2010

Chapter3

P100 渇きとスピード
1988

P101 枝は手帳
1989

P106 言葉と森の間に立って
1989

P107 午後にはガンター・グローヴにいる
1988

P112・113 トラピストの聖母子
トラピスト修道院
(北海道)
1977

P116 私の中の緑の湖
2008

P117 遠い手のスフィンクス
2006

P122 教会とカフェ
1988

P123 短い伝記を読んだ
(Work in progress)
1986

Chapter4

P133 ラムセスにまつわる記憶
1986

P135 妻の肖像
1979-80

P139 風をためて
1983

P141 はね橋を見てきた
1982

P143 バッタを食べる
森のスフィンクス
2008

P145 DR9402
「バベルの空」のための
ドローイング
1994

P147 DR9303
「長い休止符」のための
ドローイング
1993

P149 DR9404
「月から降る雨」のための
ドローイング
1994

P151 DR9501
「本の中の水路」のための
ドローイングⅠ
1994

P153 DR9403
「黒い山」のための
ドローイング
1994

写真協力/西村画廊　求龍堂　舟越桂

彫刻家・舟越桂の創作メモ
個人はみな絶滅危惧種という存在

著者　舟越 桂

発行日　2011年9月10日　第1刷発行
　　　　2013年6月8日　第3刷発行

発行者　髙橋あぐり
発行所　株式会社集英社
　　　　〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2-5-10
電話　編集部　03-3230-6205
　　　販売部　03-3230-6393
　　　読者係　03-3230-6080

印刷　日本写真印刷株式会社
製本　ナショナル製本協同組合

ISBN 978-4-08-780604-5 C0095